

## 神人的エネルギーの経験

——意志的聴従のアナロギアに即して——

はじめに

この教父研究会も早いもので三十五年ほどになるが、わたしもその発足当初より名を連ねてきた。それゆえかなり長い間、東方・西方の教父たちに学んできたことになる。そんな中、ここ数年、やや見えてきたと思えることがあり、それをめぐって少しく話をさせていたきたい。そして、会場の皆さんからいろいろ御意見を賜って、よき対話・交流の場となれば幸いである。

さて今日は、「神人的エネルギーの経験」という題を掲げた。副題の意味するところは、神のかつ神人的エネ

ルゲイアの経験の内実を、「神への関与・分有における意志的聴従ないし信のアナロギア（類比）」という観点から、いささか明らかにすることである。また発表の後半では、そうした論に密接に関わることとして、とりわけ擬ディオニュシオス・アレオパギテースと証聖者マクシモスとの「ロゴス・キリスト論」について、一つの角度からの考察を加えておきたいと思う。

あらかじめ拙論全体の基本線を言えば、「神への関与・分有の道」、そしてつまりは「人間的自然・本性（ピュシス）の開花・成就の道」を問いつくとき、その成立する可能根拠として「ロゴス・キリストの神人的エネルギーに

谷 隆 一 郎

与ること」が、いわば不可欠の契機として見出されてくるであろう。そしてそこには、「人間的自由・意志の働きと神的働きとの協働（シユネルギア）」という事態が潜んでいるのだ。「意志的聴従ないし信・信仰のアナロギア」といった言葉は、そうした問題連関の内実を指し示しているのである。

そこで今回は、主としてディオニュシオス・アレオバギテース（六世紀はじめ）と証聖者マクシモス（七世紀）の文脈に依拠して話を進める。

まず、ディオニュシオスの位置づけについて簡単に触れておく。ディオニュシオスは東方・ギリシア教父の伝統の中で正当に位置づけられるのであり、根源的動向においてはプラトン主義として捉えられてはならないであろう。（さまざまな用語、思考の枠組として新プラトン主義のものを援用しているとしても。）この点、従来の西欧の学者の見方ではなく、V・ロスキー、J・メイエンドルフといったロシア系の学者の見方が正鵠を射ていると思う。すなわちディオニュシオスは、カッパドキアの教父たち、とくにニユッサのグレゴリオスと五世紀半ばの「カルケドン信条」の精神とを継承して、神秘哲学の一つの典型のかたち

を提示した。そしてそれらの全体は、さらに証聖者マクシモスにおいてゆたかに継承・展開され、集大成されてゆくことになる。この意味でディオニュシオスは、カッパドキアの教父たちとマクシモスとを結ぶ東方教父の伝統の中間点にあつて、両者の何らかの媒介者ともなっているのである。

またいつそう大局的に言うなら、ヘブライ・キリスト教の伝統は教父時代にあつて、古代ギリシア哲学の諸々の伝統を摂取しつつ、根本における拮抗とともにそれらを超克していった。もとより教父たちは、確かにストア派や新プラトン主義などのさまざまな概念や思考の方式をも取り入れている。が、根本的にはそれらを変容させ、新たな意味と位相を附与して、いわばロゴス・キリストの真実を語り出すための道具（素材）として用いているのだ。その際、グノーシス主義はもちろん、新プラトン主義やそれに傾斜したさまざまな異端的な教理把握も、教父たちが死力を尽くして闘った相手だということが忘れられてはなるまい。

この点、ディオニュシオスのキリスト論、そしてエネルゲイア論に注目しなければ、多分に偏った評価に陥りやすい。つまり、論述のさまざまな要素や枠組を静止した仕方

で眺めて、対象的客体的に整理するだけでは、それらを貫く問題の中心的動向を見落とすことになりかねない。とすれば、われわれにとって心すべきは、(i)、全体の帰するところを見つめてゆくこと、そして(ii)、主体・自己の「神(超越的根拠)への関与の道行き」を自らの内側から問い披くことであろう。

これら二つの事柄には、「人間的自然・本性(ピュシス)の変容と生成とのダイナミズム」が漲っている。そしてその根底に、「ロゴス・キリストの働き(エネルギー)との出会い(カイロス)」があるいは「神人的エネルギーの経験」が存しよう。またそれは恐らく、「ロゴス・キリストの受肉(神人性)存在」を遙かに証示していると考えられよう。

そこで次に、今回の提題の順序をあらかじめ提示しておく。

一 デイオニュシオス・アレオパギテースにおける

「神への関与・分有のアナロギア」

- (一) デイオニュシオスの分有論
- (二) 善の分有・希求のアナロギア
- (三) 絶えざる創造と意志

(四) 神的な愛の脱自的働き

二 神人的エネルギーと「ロゴス・キリストの受肉(神人性)」——デイオニュシオスから証聖者マクシモスへ——

(一) 神人的エネルギー

(二) 証聖者マクシモスにおける「意志的聴

従ないし信・信仰のアナロギア」

(三) 神人的エネルギーの経験——ロゴス

・キリストの受肉(神人性)を証示するもの——

(四) 結語に代えて

一 デイオニュシオス・アレオパギテースにおける「神への関与・分有のアナロギア」

(一) デイオニュシオスの分有論

デイオニュシオスにあつて件の分有論は、必ずしも単に客体的に静止した階梯を語るものではなくて、全体の動向としては変容・生成のダイナミズムを基調とし、その中心

に人間が立っている。そしてその要として、いわば「神への関与における意志的アナログア」が認められるのである。その際、最後まで注意すべきは、神の「ウーシアとエネルギーアとの峻別」という事態である。それはとりわけ、東方・ギリシア教父の伝統の思想財とも言うべきものであった。

(i) すなわち神 (θεός) ないし神的根拠・原理 (θεολογία) は、どこまでも超越的であつて、そのウーシア (実体・本質) はいかなる知、限定によつても捉えられない。この意味では神は、否定の極み、超越の闇であり、無限性そのものである。(この点ディオニュシオスは、一言で言つておくなら、ニュッサのグレゴリオスのたとへば『モーセの生涯』における「闇、暗黒のうちなる神の顕現」という文脈を、明らかに踏襲している。)

(ii) しかし他方、神はそのエネルギーア (働き、活動) によつて万物を貫いている。この意味では神とは、すべての存在物を今もいつも存立させ持続させている「エネルギーア (働き)」そのものなのだ。それゆえ自然界のあらゆる事物は、それぞれの分 (形相) に応じて神的エネルギーアを分有している。が、そうしたエネルギーアに対して、

ただ人間のみが主体的かつ意志的に改めて応答しうるのである。しかも、その意志的応答は、われわれにとつてつねに「より善くか」、「より悪しくか」という両方向に開かれており、そこに後述のような「人間の自由の深淵」が存するのだ。

とすれば、われわれにとつて本来は、この時間的世界での「神的エネルギーアとの出会いと経験」から神探究が為されるのであり、そうした経験の場を離れて神の本質論が一人歩きすべきではない。あるいはまた、神をめぐる諸々の形相 (エイドス) のいわば無時間的な関係といったことに、論が終止してはならないのである。

さてディオニュシオスによれば、「神はすべてのものであり、またいかなるものでもない」すなわち、神の徹底した超越性と万物における神の内在とは、こうした多分に逆説的な言葉で語られているのである。

その際、「神はすべてのものである」とされるのは、万物が神的エネルギーア (働き) をそれぞれのかたち (形相) に従つて受容し宿していることによつて、自らの存在根拠たる神を指し示しているからである。この意味では、さ

さまざまな神名(神の名)は、「神的エネルギーの名」だと言つてよい。他方、「神はいかなるものでもない」とされるのは、神がいかなる思惟的な名、感覺的な名で呼ばれても、それらは神(ないし神性、神的根拠)のウーシア(実体・本質)を捉えたものではありえず、神自身はわれわれにとつて最後まで「知られざるもの」に留まるからである。

この点、神(Geoc)という名すら例外ではなく、無限なる超越的根拠を指し示すしるしなのだ。そこで、ディオニュシオスはこう言う。「われわれに開示される神的なものすべて、(神的エネルギーの)分有(関与)によつて知られる<sup>②</sup>」と。言い換えれば、諸々の存在物(被造的なもの)は、自らの有限なかたち(形相)に従つて、無限なる神的エネルギーを類比的(アナログア的)に分有しているのである。

ところで、さまざまな神名には二つの系譜があるという。すなわち、(i)、善、美、存在、正義といった思惟的な名(名称)と、(ii)、太陽、木、水、門、牧者といった感覺的な名である。そして、これら二つの系譜の名は、「肯定の道」と「否定の道」という両方向から意味づけられている。が、これについては、簡単に次のことだけを確認して

おく。

肯定の道にあつては、善や存在といった第一のものから始めて中間のものを通り、最低のものまで降りてゆく。その際、それらの神名をことごとく肯定する。そして肯定を旨として、諸々の感覺的な名(神名)も、何らかのしるし・象徴として神を指し示すというわけである。他方、否定の道にあつては、逆に最低のものから出発して最高のものにまで上昇してゆくが、それらすべての名を否定してゆくのである。ただし、こうした肯定の道、否定の道のいずれにおいても、全体としては徹底した否定の調べに貫かれており、神のウーシア(実体・本質)そのものは決して知られえない。とすれば、われわれは本来、無限性、超越性に開かれてゆくばかりであろう。

それはともあれ、改めて言えば、諸々の神名は善、美、存在、正義という神名も、太陽、木、水、門、雲などの神名も、「神のウーシアを示す名」ではなくて、「神のエネルギーを何らか受容し宿した名」なのである。つまり、神名はすべて「エネルギー」の名であつて、さまざまな神名は、それぞれの存在物における「神的エネルギーの分有」から取つてこられるのだ。そしてそのことには、各々

の事物の形相と存在様式に従った度合ないし類比（アナログア）が存するであろう。それゆえそこに、分有のアナログアとも言うべき構造が見出されることになる。

しかし注意すべきは、そうした分有のアナログア構造がディオニュシオスにあって、事実として静止し完結したものと看做されていないということである。かえって、あらゆる存在物は——後に述べるごとく人間を紐帯としてであるが——、神性・善性を希求する度合に従って、アナログアの自らの存在様式の変容を蒙り、より高い位階秩序（ヒエラルキア）へと上昇し関与してゆくべく招かれていると考えられよう。そして恐らく、そうした変容・生成のダイナミズムの中心に、ある種の媒介者として人間が立っているのである。

## （二）善の分有・希求のアナログア

そこで、最も重要な神名としての善（*agathos*）について、ディオニュシオスの文脈の基本線を押さえておこう。

善とは、「万物の希求するところのものである<sup>30</sup>」。「これは古代ギリシア以来の共通の把握でもあるが、ディオニ

ュシオスはさらに、問題の基本線を次のように見定めている。

「万物は善を、自らの根拠として、統合として、そして目的（完成）として希求する。つまり聖書が語るように（ローマ一・三五）、善とは、そこから万物が存立してくるところのものであり……善のうちに万物は統合されており……そして万物は、それぞれに固有の限度（目的）として善を志向しているのである<sup>34</sup>」

こうした善は、いわば実体（*ウーシア*）を超えており、ある意味では存在よりも意味射程の大きい言葉だという。なぜなら、「善は自らは形相（*的限定*）なくして形相を与え、実体なきものとして実体を過剰に持ち、……在らぬもの（*αὐτὸν*）すら善を恐れ求めるからである<sup>35</sup>」。（このように善は、万物の「存立」、「統合」、「目的」として、大局的な観点から語られている。そしてそれらは、古来の説明方式を用いるなら、それぞれ「能動因」、「範型因」、「目的因」に対応している。）

そこで逆に言えば、万物は「善の分有・関与に従って秩

「序づけられる」ことになる。より正確には、万物（被造的  
事物）は善性の力と働き（エネルギー）を分有する度合  
に従って、アナログア（類比）的に存立しているのだ。こ  
れは、「善の分有のアナログア」と呼ぶものである。  
そしてこのことは、個々の事物の存在様式に即して次の  
ように分節化されている。すなわち、「知的なものと言語・  
ロゴスのなものは知的に、感覚的なものは感覚的に、感覚  
なきもの（生命体）は生命的欲求の固有の動きによって、  
そして無生物は実体的分有への適合性によって。」、それ  
ぞれの仕方です善を希求している。とすれば万物は、自らに  
固有の形相と存在様式に従ってアナログ的に善を希求し  
ていることになろう。ちなみに、人間以外の事物にあつ  
ては、それぞれの形相（エイドス）ないし種において「善  
の分有の限度」が定まっている。つまりそこでは、希求  
とはいえ、それは何ら意志的な働きではなく、それぞれ  
の形相と自然・本性（ピュシス）が自らの完成への「動き」  
においてあることにほかならない。それゆえ、それらの場  
合は、勝義の個・個体は未だ発現していないということに  
なる。

しかし、ロゴスのかつ意志的存在者たる人間にあつては、

善をすぐれて希求することは各人の自由・意志に依存し、  
それに従って希求ということの度合が異なってくるであ  
らう。そして先んじて言っておくとすれば——それは証聖  
者マクシモスにおいて明確に展開されていることであるが  
——、人間以外のあらゆる存在物は恐らくはすべてが相俟  
つて、人間における「善への希求のアナログア」へと収斂  
せしめられるであろう。その際、人間はまさに「自然・本  
性的な紐帯」として、他の事物における「善への希求」を  
ロゴス（言語）化させ、自らのうちに包摂して、いわば霊  
的かつ全一的な交わり（エクレシア、広義の教会）を形成し  
てゆく役割を担っているのである。

このように見るとき、ディオニュシオスの文脈はその中  
心的動向としては、固定した位階秩序（ヒエラルキア）を  
語っているのではなく、むしろより上位の、より善き上  
昇・変容の機微を問題としていると言うべきであろう。デ  
イオニユシオスにあつて確かに、知性的存在者（天使）と  
その位階などの事柄がさまざまに叙述されている。が、そ  
うした論にしても、人間とはかけ離れた存在者を単に客体  
的に提示するためではなくて、ほかならぬ人間の成りゆく  
べき境位を凝視するためであつたと思われる。つまり、主

たる関心は、あくまで可変性と身体性とを担った「現実の人間」の方にあるのだ。

してみれば、ディオニユシオスの論は全体として、対象ならぬ超越の対象たる神に与りゆくことを志向しつつ、神名としての善への「希求のアナロギア」を問題としている。そしてそれは、われわれ人間の「真に成りゆくべき姿」を、また「善への（神への）関与の道行き」とその現に成立しうるための可能根拠とを、あらわに語り出していると言えよう。

さて、魂・人間のそうした道行きは、むしろ一挙に完成して終極に達してしまうものではなくて、魂の浄めと自己否定を介した「絶えざる変容・生成」という性格を有する。それゆえにこそそこには、善の働きに対する「意志的聴従のアナロギア」が何らか不可欠の契機として漲っているのである。この点、とりわけ注目すべきは、ディオニユシオスの次の表現である。

「善ははじめに適度の光を送り、魂の眼が光を味わった後でより多く渴望するならば、より多く自らを与

え、遙かにゆたかに輝く。《なぜなら、彼らはより多く愛したからである》（ルカ七・四七）。つまり善の光は、魂が上方を見ることのアナロギア（類比）に従って、魂をつねに高みへと引きつけるのである。」

この文中、「善の光」とは、「善・善性のエネルギー（働き）」を示す。そうした「善の光」、「神的エネルギー」は、必然的に流出して直接にこの世界、この身に宿り顕してくるのではなく、魂の意志的アナロギアにしたがってそれだけの割合で輝き出るのである。言い換えれば、超越的な善のエネルギーは、それ自体としては有限なものによって制限されることはないが、人間の知性的かつ意志的な働きがそれに聴従する度合に従って、アナロギア的に受容され顕現してくるのである。このことに関しては、同様に次のようにも語られている。

「善はいかなる存在者にとつても、全く交わりえぬものではない。つまり善は、それ自身に留まったまま……しかも超実体的な光をそれぞれの存在者に対して、アナロギアの照明によって善にふさわしく放射す



る。そして善は、善に対して能う限り身を捧げている。知性（ヌース）を、彼らが到達しうる観想と交わり、そして「神との」類似へと上昇させるのである。<sup>(8)</sup>」

ここには、善の「アナロギア的照明」という言葉が用いられているが、改めて確認しておくべきは次のことである。すなわち、善に、そして神（善性ないし神性）に与りゆく道は、善からの一方的必然的な力によるものでもなければ、逆に人間の側の自力によるものでもなくて、両者の微妙な協働（シユネルギア）による。そこで今一度強調するならば、「善の光による照明」や「善への関与（分有）」といったことは、われわれが善のエネルギーにできるだけ身を差し出すことに従って、アナロギア的に成立してくるであろう。それゆえそこには、自由な応答と聴従という契機が、不可欠の媒介として働いているのである。

### (三) 絶えざる創造と意志

右に述べたことのうちには、神の「創造」ないし「絶えざる創造」について、なおも吟味しておくべき事柄が含ま

れている。というのも、善のエネルギー（働き）が意欲的アナロギアに従って、その分だけこの世界、この身に顕現してくるといふ事態は、神の世界創造（生成）が必然的流出ではなく神的意思によるものだという把握と、微妙に通底しているからである。

そこで探究の一つの指標としてあらかじめ言うなら、神的意思による創造（生成）とは、単に過去の一時点で生じて完結した出来事と看做されてはならない。創造とはむしろ、勝義には今も何らか持続しており、しかも「人間の自由な意志的応答を介して」、また「それとして」現に生起しつつあると考えられよう。

この点に関して、ここでは「神が動かされ、かつ動かす」というディオニシオスの言葉の意味するところを窺っておく。同様の表現は証聖者マクシモスも用いており、以下の考察では両者の文脈を念頭に置いている。

(i) 創造が神的意思にもとづくという際、それは神の人間愛（φιλανθρωπία）によるといふが、そのことはいわば、そのようなかたちにおいて実は「神が動かされること」と解されている。この意味では、神のエネルギー（働き、わざ）にも——むろん神のウーシアではなく——

ある種の受動（パトス）が見出されるのだ。（ちなみに、「神が動かされ」、「人間愛によって創造のわざを為すこと」は、宮本久雄さんの言う「エヒイエ（脱在）」の最初のかたちでもあらう。）

（ii）すでに述べたように、人間の「神への関与の道」は、神的エネルギーに意志的に聴従してゆく度合に従ってアナログ的に顕現してくるのであった。そしてそのとき、人間の自然・本性（ビュシス）は単に「在ること」を脱して、「善く在ること」（το εὖ εἶναι）ないしアレテー（善きかたち、徳）へと形成されよう。善というものは、そうした「魂・人間のアレテー」というかたちにおいて、はじめてこの時間的可変的な世界に現出するのだ。（それ以前には、善は未だ隠れたままであって、現実には誕生・生成していないと言ってもよい。）そしてこれは、「神が動かすこと」とだとされるのである。

すなわちその際、神はいわば目的因のように、善性・神性への関与ないし結合へと魂・人間を動かすのだ。そしてそこには、エヒイエ（脱在）の第二の、しかしいっそう勝義のかたちが認められよう。

かくして、「神が動かされ、かつ動かす」という二つのことは、根拠と終極あるいは原因と目的との間の、ある種の円還的構造を形成している。もとよりそれは、単に閉じられた円還ではなく、元の姿への平板な回帰でもない。かえってそこには、根拠（神、超越的な善）への意志的な還帰を介した「新たなより善き形成」、「絶えざる創造」という事態が見出されよう。

先に、神的エネルギー（神性・善性の働き）への意志的聴従によつてはじめて、この世界に善が勝義に現出してくるとした。より正確に言えば、根拠たる神的ロゴスのエネルギーに立ち帰り、自由・意志によつて「より善く応答してゆくこと」によつて、魂・人間の「より善きかたち（アレテー）」がいわば再帰的な仕方での世界、この身に顕現し受肉してくるであらう。この意味で、「根拠への意志的な還帰」とは、「創造のわざの持続と展開」をわれわれ自身が何ほどか担いゆくことでもあらう。しかし、もとよりそれは、われわれにとつて最後まで途上のことである。それゆえ、右のような比較級表現によつて、神への道行きにおける「絶えざる変容・生成のダイナミズム」が指し示されているのである。

(四) 神的な愛の脱自的働き

さてディオニュシオスは、同様の文脈であるが、パウロの周知の言葉を鮮やかに解き明かしている。それによれば、「神的な愛は脱自的であつて、愛する人が己れに属することを許さず、己れを出て、愛されるものに属さしめる。」つまり平たく言えば、神を愛する人は、神に属さしめられるのだ。そして注目すべきは、それに続く次の一文である。

「パウロは神的な愛に心奪われて、その脱自的な力に与つて次のように言う。『もはやわたしが生きていゝるのではなく、わたしのうちでキリストが生きていゝる』(ガラテア二・二〇)と。そのときパウロは、真に愛する者として、神の愛すべき生命を生きる者となつたのである<sup>(10)</sup>。」

ここに窺われるように、人間が「神の脱自的愛に貫かれたこと」、つまり受動の極みは、同時にまた、真の能動的な愛として現出してくる。

この点、改めて言うなら、(i)、神の脱自的な愛とは、人間のいわば「愛の傷手」(雅歌二・五)が生じることへと「神が動かされること」である。そして、「愛の矢」(聖霊)によつて人を射るのは神の働きであるが、そのことへと「動かされる」とされる限りで、神のうちに何らかの受動(パトス)が存するのだ。他方、(ii)、人間が脱自的に愛する者として神との結合・一体化を憧れ求めることへと、「神が動かす」とされよう。簡明に言うなら、神は「神への愛」としてこの有限な世界に現出してくるのである。

ところで、パウロが「わたしのうちでキリストが生きていゝる」と語るのは、一方的な必然でも自由の放棄でもないかえてそれは、証聖者マクシモスの表現では「意志的な聴従」を語るものであつた。その際、人間の魂ないし人間的・本性が神的エネルギーを受容し発現させるための器とも道具ともなつていゝる。そこに、「意志的聴従ないし信のアナロギア」が語られることになるのである。すなわち、そうした意志的な応答の仕方に従つて、神的なエネルギーないしプネウマ(霊)が魂のうちに注ぎ込まれよう。そしてそれは、人間が神(善性・神性)に現に与りゆ

く道の成立根拠でもあろう。(ちなみに、そうした道は東方  
教父の伝統にあつて、「浄化」、「照明」、そして「没我」ないし  
「神秘への参入」といった三つの階梯として、さまざまに語ら  
れるのである。)

それはさて置き、神的エネルギー・プネウマの十全な  
宿りこそ、「自分のうちでキリストが生きている」という  
ことであらう。が、そこには、己れ自身を何ほどか無にし  
つつ、いわば器として差し出すといった自己否定の契機が  
必ずや介在しているのだ。それゆえそこに、ある種の循環  
の存していることが認められよう。つまり、「神的エネル  
ゲイアの働き」と「人間的自由・意志の働き」とは、むろ  
ん二者択一などではなく、不思議な循環(交流)を為して  
いるであらう。

では人間的自由・意志は、いかにして神的エネルギー  
により善き仕方で関与しうるのか。この問いは、われわれ  
が現に「善く意志しうること」の可能根拠を改めて問題に  
することでもある。それはさらに、根底においては、「ロ  
ゴス・キリストのエネルギー」、つまり次に扱う「神人  
的エネルギー」という問題位相に接しているのである。

いわば「意志論の最前線」であり、普遍的に哲学(=愛

智)の中心に関わる問題であらう。そこで以下においては、  
まず神人的エネルギーを語るディオニュシオスのテキス  
トを取り上げ、さらにはそれをゆたかに展開し吟味した証  
聖者マクシモスの文脈を見定めてゆくことにしたい。

## 二 神人的エネルギーと「ロゴス・キリストの受肉

(神人性)

——ディオニュシオスから証聖者マクシモスへ——

### (一) 神人的エネルギー

ディオニュシオスは『書簡』四において、神人的エネル  
ゲイアという言葉を用いて問題の中心場面を照らし出して  
いる。それは、「ロゴス・キリストの神人性存在」(つまり  
受肉)を遙かに指し示す言葉として注目に値する。そして  
証聖者マクシモスも、用例は少ないのだが、肝心のところ  
で神人的エネルギーという言葉を採用し、透徹したロゴ  
ス・キリスト論を展開しているのである。

ではまず、ディオニュシオスにあつて件の論の強調点は  
どこにあつたのか。それはあらかじめ一言で言えば、「神

の子、イエス・キリストのウーシア（実体・本質）は知られないが、そのエネルギー（働き、わざ）は経験され、何らか知られうる」ということであつた。この点、次のように言われている。

「われわれは〔神の子〕イエスが人間的に実体化した（つまり人間として誕生した）ことを神秘的教えとして受け入れたが、いかにしてイエスが、乙女マリアの血から〔通常の〕自然・本性とは異なつた法則によつて形成されたかを知りえない。……そのほかにもイエスの超自然・本性的な自然性（*phorokalyta*）については、何も知りえない。」

このことからすれば、イエス・キリストの受肉（神人性）について、そのウーシアは、ただそのエネルギーの経験から何らか志向的に知られ指し示されると言うべきであろう。これはつまり、使徒たちおよび彼らに連なるすべての人々の、根源的出会い（カイロス）の経験であつたと思われる。というのも、そこにあつては各々の時点を対象化するような通俗的時間把握は突破され、魂・精神の根底を貫

くかのような経験が、いわば同時性として触れ合うからである。

ディオニシオスはまた、こうも言う。「神的なことに ついての共感・同苦（*συμπάθεια*）によつて、人は教え学ぶことのできない神秘的合一へと信・信仰へともたらされる。」ここに共感とは、神的エネルギーないし pneuma（霊）に改めて出会い感応した姿であろう。そして信・信仰（ピステイス）とは、原初的には、同じく神的エネルギー・ pneuma に心披いて、それを受容し宿した「魂の私たち」だと言えよう。

さてそこで、とりわけ注目すべきは、『書簡』四に語られた次の言葉である。

「イエスは際立つて人間を愛し、人間を超えてかつ人間に即して、人間的実体から超実体的に実体化している。……そしてイエスは、単に神として神的なことを為したのではなく、また単に人間として人間的なことを為したのでもなく、神が人間となつて、われわれに何らか新たな神人的エネルギー（*Θεωδουλική*）

ενεργεια) を働かせたのである<sup>(21)</sup>。」

ここには神人的エネルギーという言葉が、印象深く用いられている。それは実質的には神的エネルギーという語とほとんど同義であるが、神性と人性という両者の働きが結合した姿を示している。さしあたり言うなら、イエス・キリストにはこうした神人的エネルギーが漲り現存しており、そのことはキリストの言葉とわざが証しするところであった。しかし同時に、そこにはキリストにまみえた使徒たちの経験が介在している。すなわち使徒たちは、神人的エネルギーに貰かれて「愛の傷手」を受け、キリストへの限りなき愛に促がされた。そしてその「神人的エネルギー」の経験のかたち(脱自的愛)が、「神人性そのもの(ロゴス・キリストの受肉存在)」を——そのウーシアは決して知られえないとしても——遙かに証示していると考えられよう。

ディオニュシオスは先の引用文以上のことは語っていないが、証聖者マクシモスはディオニュシオスを継承し論を大きく展開させている。そこで以下、その文脈に即して問題の中心的位相をいささか問い披いていきたい。

## (二) 証聖者マクシモスにおける「意志的聴従ないし信仰のアナロギア」

有限な被造的・本性は、マクシモスによれば完結し静止したものではなく、自らの自然・本性として広義の「動き」のうちにある。とりわけ人間本性は本来的には、単に「在ること」から「善く在ること」(to eu einai)へと、つまりアレテー(徳)へと開かれ定位されている。そこに不可欠の媒介を果たしているのが、自由な意志の働きであった。

この点、逆説的な意味においてではあれ一つの規範と目されるのが、先に言及したパウロの言葉である。「もはやわたしが生きているのではなく、わたしのうちでキリストが生きている」(ガラテア二・二〇)という件である。それについてマクシモスは、次のように喝破している。

「そのように言われているからといって、心騒がせてはならない。なぜなら、パウロはその際、自由の廃棄が起ると言っているのではなくて、自然・本性に

従った確かで揺るぎない姿、あるいは意志的な聴従を語っているからである。それは、われわれの《在るところ》が真に実現し、「神の」似像が原型へと回復する動きを現実のものとするためであった<sup>13)</sup>。」

ここには、使徒たちの「イエス・キリストとの出会い」の内実が典型的なかたちで示されている。そこから読み取られるように、われわれが神れないし神人的エネルギーに対して意志的に聴従してゆくならば、それは「善く在ること」あるいは「アレテー」という善きかたち（徳）をもたらすであろう。言い換えれば、われわれが神的エネルギーに能う限り己れを明け渡し、いわば器となるとき、そこに神的エネルギー・プネウマがゆたかに注ぎ込まれよう。それはある意味で、この有限な世界における勝義の「善の現出」でもあった。

しかしそうした事態は、むしろ一挙に成就してしまうのではなく、われわれはどこまでもその道行きの途上にある。従ってそこには、神的エネルギーへの聴従の度合にに応じて、その受容と顕現・宿りとの度合が見出されよう。それは、「意志的聴従のアナロギア」とも呼びうることである。

さてマクシモスは、そのことのさらなる意味（志向するところ）を「信・信仰のアナロギア」という言葉を用いて解き明かしている。

「各々の人は、自らのうちなる信・信仰（ピステイス）のアナロギア（類比）に従って、聖霊の明らかかな働き（エネルギー）を獲得する（ローマ二・三）。つまり、各人は自分自身の恵みのいわば執事なのだ<sup>14)</sup>。」

「各々の人の信の度合は、諸々の神的な善きものが現出し存続するための原因だという。すなわち、自らが信じているその仕方に従って、われわれは行為の熱心さにおいて進歩するのだ。実際、行為する人は実践のアナロギアに従って、信の測りを証示している。信じたその度合に従って、人は恵みを享受しているからである<sup>15)</sup>。」

こうした文脈での「信・信仰のアナロギア」という言葉は、神の呼びかけ、神的エネルギーに対して、人が意志

的に応答し聴従してゆく度合と類比を意味している。そして、かかる「信のアナロギア」に従って、その分だけ神的エネルギーないし pneuma (霊) が魂・人間のうちに注ぎ込まれ、顕現してくるであろう。が、その際、改めて注意すべきは次のことである。

(i) 神的エネルギーはその名に値するものである限りで、それ自体としては、つねに時空を超えて働いていると言わねばなるまい。

(ii) しかし神的エネルギーは、あるときその都度の今、この世界この身において現に経験され顕現してくるであらう。

とすれば、そのことには、「つねに」と「あるとき」との(すなわち、永遠と時間との)著しい緊張が存しよう。それは、単に形相間の無時間的な結合を問題にするような論に解消されるはならないのだ。そして今一度強調すれば、神的エネルギー・ pneuma の受容と顕現とは、「意志的聴従の度合」、「信仰のアナロギア」に従って、ほかならぬわれわれの身に生じうるであらう。

ただし、「自由・意志による聴従」や「信・信仰の働き」が善き仕方て成立するためには、神的働きのある種の協

働(シユネルギア)が必要であった。従ってそこには、すでに言及したように、微妙な循環の存していることが認められよう。すなわち、神的エネルギー・ pneuma が万物の存立しうる根拠として、また一性を与える根源的結合力として働いていなければ、そもそも人間の自由・意志が存立して働くこともありえない。しかし他方、自由・意志がその都度の今、善く働くことがなければ、神的エネルギー・ pneuma のより善き受容と顕現も現実には生じえないであらう。

とはいえ、このように多分に循環と見えることは、決して単なる矛盾でも無制限の堂々巡りでもありえない。とすればここに、「神的エネルギー・ pneuma のいわば範型的現成」とも言うべきことが、恐らくはすべての意志的行為、すべての経験に先んずる事態として、とりわけ「現に善く意志すること」の根底に働いているであらう。

もとよりわれわれは、それとは反対に、「悪しく意志すること」つまり「神への背反、罪」に陥る可能性にもつねに晒されている。ここに罪 (hamartia) とは、マクシモスによれば「自然・本性(ビュシス)に背反して」人やものに関わることであった。それはまた、「神への背反」とも



なるのだ。それゆえ、人間は誰しも、自らの自然・本性に背反するわざを自由・意志によつて為してしまふという、いわば「自由の深淵」を抱えている。であればこそ、自由意志が現に善く働くときには、その可能根拠として「ロゴス・キリストの受肉（神人性）のエネルギー」が、つまり「善そのもの（善性・神性）の現成した働き」が、ほかならぬ人間的意志のうちに現前し働いていることが見出されよう。

こうした見通しの典拠をさしあたり一つだけ挙げるとすれば、それはパウロの次のような言葉である。

「あなたがたが〔神に〕つねに聴従したように、わたしがともにいるときだけでなく、いない今もなおさら聴従し、恐れおののきつつあなたたちの救いを達成するよう努めるがよい。なぜならば、あなたたちのうちに働いて、御旨を為さんために〔善きことを〕意志させ、かつ働かせておられるのは、神だからである。」  
(フィリピ二・二二—二三)

この一文には、「神と人間との協働」ということがわれ

われ自身の意志の構造として鮮やかに語り出されており、それは以下の探究にとつて一つの指標ともなるのである。

(三) 神人的エネルギーの現存——ロゴス・キリストの受肉（神人性）を証示するもの——

神人的エネルギー・ pneuma の経験の典型は、もちろん使徒たちにおける「イエス・キリストとの出会い（カイロス）」に存する。改めて言うなら、彼らがキリストに出会ったとき——ただしこれは、受肉、受難、復活の全体として働く神人的エネルギーとの出会いのことだが——、いわば「愛の傷手」（雅歌）を受け、「信・信仰という魂のかたち」を刻印された。と同時に、そうした出会いの根底に漲る神人的エネルギーと結合してゆくべく、「無限なる愛の渴望」が生じた。すなわち彼らは、己れの生の全体を捧げゆくような「愛の道行き」に促されたのだ。（以下、キリストとの出会いの場面では、ほとんど同義語として神人的エネルギーという言葉を用いる。）

神人的エネルギーの経験とは、イエス・キリストの「神のかつ人間的なわざ（働き）」に出会うことである。実

際イエスは、「もしわたしがわたしの父のわざを為すならば、たといわたしを信じなくとも、そのわざを信じよ」(ヨハネ一〇・三八)と語る。そのことからして、イエス・キリストの受肉(神人性)ということがはじめて見出され発語される「発見の順序」と、「実体・本質(ウーシア)の順序」とを区別して、次のように言うことができよう。

(i) 発見の順序としては、われわれにとつて神人的エネルギーの経験が先であり、そこからはじめて「ロゴス・キリストの神人性存在(受肉)」が証示される。すなわち、確かな根源的経験からその根拠が、(つまり、ウーシアとしては知られざる神人性存在が)指し示されるのである。

(ii) しかし、実体・本質の順序としては、神人性存在のウーシアからそのエネルギーが働き出すとしなければならぬ。

してみれば、「ロゴス・キリストの受肉」とは、神人的エネルギーの経験による志向的知の向かうところ、つまりその意味での「信・信仰の超越的対象」であって、客体知として語られてはならないものなのだ。「聖霊によらなければ、誰もイエスをキリストと告白しえない」(一コリント二・二三)とされるゆえんである。

ところで、教理(ドグマ)に関する表現として、マクシモスはたとえばこう言っている。

「キリストは受難を蒙りつつも真に神であったし、奇蹟を行いつつも真に人間であった。つまりキリストは、神性と人性という二つの自然・本性(ピュシス)の、語りえざる一性に即したヒュポスタシス(位格、個的現実)であった」<sup>16)</sup>。

これは、いわゆる「神性と人性とのヒュポスタシス(ペルソナ)的結合」を示す一文である。しかし、先に述べたような「根源的経験からその根拠へ」という探究方向からして、注意すべきは次のことである。

「カルケドン信条」(四五一年)にあるように、神性と人性との結合様式は、「融合せず、変化せず、分割せず、分離せず」という風に、全体として否定辞を介して間接的に示されているに過ぎない。つまりここでは、およそ二つのものの結合のあらゆる場面が尽くされているが、それは、キリストという神人性存在のウーシアを人間的知の限界内に引きずり落とさないということの言明なのである。

この意味で、右の四つの否定辞は、「キリストの神人性（受肉）の姿」がいわば無限性（神名）に開かれ、まさに神秘としてあることを、「閉じられた限定の否定」という仕方の間接的に浮彫りにしている。そしてそのことは、人間（人生）が限りなく神性に与りゆく、その場と可能性を否定を介して守つていると考えられよう。

さて、神人的エネルギーないし神的靈（ pneuma ）との出会いとその受容は、人間的自然・本性がより善く神性に結合してゆくことを可能にし、それゆえ「新たな生の誕生」をもたらすものであった。このことについてとりわけ注目されるのは、証聖者マクシモスの次の表現である。

「主（ロゴス・キリスト）は、神人的エネルギーを自らのためではなく、われわれのために働かせ、人間的自然・本性をその自然・本性を超えて新たにした。……つまり主は、自然・本性（ピュシス）において二様であり、相互に交流する神のかつ人間的な生を適切に顕現させた。その生は、神的な法と人間的な法とによって、同一のものとして混合なき仕方と結合して

る。すなわちその生は、単に地上のものと無縁で逆説的なものではなく、また諸々の存在物の自然・本性とは異なるものでもなくて、新しく生きる人間の「神のかつ人間的な」エネルギーをしるしづけているのである<sup>17)</sup>。」

これは端的には、イエス・キリスト自身の姿を語る言葉であろう。が、同時にまた、われわれの「真に成りゆくべき究極の姿」を語る言葉でもある。現に在るわれわれはすべて、その姿に完全には到達しえず、あくまで途上にあるのだ。「われわれは神の直視（エイドス）によってではなく、信（ピステイス）によって〔この世を〕歩んでいる」（ニコリント五・七）とパウロの語るゆえんである。

そこで、今一度言うなら、キリストの神人性（受肉）と神人的生を語りうるのは、その原初的場面としては、使徒なら使徒がイエス・キリストに出会い、その神人的エネルギーを受容したことにもとづく。そうしたいわば「愛の傷手」の経験（つまり信の成立）から、己れ自身を超えゆく愛がすぐれて働き出すのだ。そして、そのような脱自的愛が志向する究極の目的は、神人的エネルギーとの全

き結合であり、神人性のかたちであろう。とすれば、キリストの受肉、神人性存在は、人間の脱自的愛の志向するところとして語り出されよう。すなわち、神人的エネルギーの経験がそのエネルギーの発出する主体（源泉）たる「神人性存在（受肉）」を証しし遙かに指し示しているのである。

かくして、「ロゴス・キリストの受肉」ということについて、そのウーシア（実体・本質）は決して客体知の対象ではないが、その神人的エネルギーは、人間が己れを無みしゆく脱自的愛の内奥に、その「成立する根拠」かつ「志向する目的」として、いわばその都度の今、現前し働いていると考えられよう。とすれば、そのことはある種の同時性として、歴史上のいかなる今においても生起しうるであろう。そしてそこに、「受肉の現在」とも呼ぶべき事態が見出されてくることになる。

#### (四) 結語に代えて

神のエネルギーないし神人的エネルギーとの出会いとその受容・宿りとは、人間的自然・本性（ピュシス）の

開花し成就してゆく道となるならば、「ロゴス・キリストの受肉」とは単に特殊な教理（ドグマ）である以上に、より普遍的に「人間がまさに人間になりゆくこと」、「神の似像として開花してゆくこと」の根幹に関わるものとなる。というのは、ロゴス・キリストの神人的エネルギーは、それに心披いて聴従する人にとって確かな経験として宿され、神性に与りゆく道行きを成り立たせるものとなるからである。

そうした根源的出会い（カイロス）の経験からは、己れ自身を無みするかのような脱自的愛（アガペー）が生じよう。それはいわば、諸々の欲望や執着に捉われた自我の砦が何ほどか突破された姿でもある。そして、そのようなときはじめて、隣人・他者との真実の交わりも愛も可能となると思われる。

実際、身近な場面を振り返れば、他者との関わりにあつて、ほんの小さなかたちで「善く意志すること」も、小さき者の一人に何らか「善きわざを為すこと」も（マタイ二五・四〇）、結局は「神のエネルギー・ pneuma への与り」あつてこそ、現に成立してゆくであろう。

ところで既述のごとく、神のエネルギー・ pneuma は、

それ自体としては「つねに」、時と処とを超えて現存し働いているとしなければならぬ。しかし他方、それは「あるとき」、歴史上のその都度の今、われわれの「意志的聴従（ないし信・信仰）のアナログアに従って」現実にな成し顕現してくるのだ。そしてかかる神的エネルギーとプネウマ（霊）は、今一度言うなら、われわれのほんの小さな善き意志、善きわざのうちに（そしてつまりは「善く生きること」のうちに）、その成立根拠として働いているのである。

してみれば、心碎かれた謙遜のうちに神的エネルギー・プネウマを受容し宿すという、一見単純な一つのこと、ほとんどすべての問題が一度び収斂してくる。そして、われわれが少しく「謙遜であること」、「己れを無にする」との根底には、恐らく「ロゴス・キリストの全き自己否定（無化）のエネルギー」が、いわば原範型として、また可能根拠として現前していると考えられよう。それに与ることなくしては、われわれはついに傲りと罪（神への背反）のうちに取り残され、かのおどろきの木から切り離された枝のように（ヨハネ一五・五六）、多分に非存在の淵にさ迷うことにならう。

しかし、そうであればこそ、われわれのあらゆる意志とわざとを貫き、その都度の今、自由な応答と聴従とを促しているのは（フィリピン二・一三）、およそ人間の経験に先んじて現存し、われわれに呼びかけている神の憐れみであろうか。ともあれ、恐らくはすべてに先んじてある神的なわざに、そして神的エネルギー・プネウマの現存に思いを潜めて、この小さな提題を終えることにしたい。

注

- (1) Pseudo-Dionysius Areopagita, *De Divinis Nominibus*, I, 6, 25 (Marietti, Rome, 1950. の項番号に於て) : PG3, 596A.
- (2) *Ibid.*, II, 7, 55 : PG3, 645A.
- (3) *Ibid.*, III, 4, 120 : PG3, 700A.
- (4) *Ibid.*, IV, 4, 121 : PG3, 700AB.
- (5) *Ibid.*, IV, 3, 111 : PG3, 696D.
- (6) *Ibid.*, IV, 4, 122 : PG3, 700B.
- (7) *Ibid.*, IV, 5, 129 : PG3, 701A.
- (8) *Ibid.*, I, 1, 10 : PG3, 588CD.

- (9) *Ibid.*, IV, 13, 171 — IV, 14, 178; PG3, 712AC.
- (10) *Ibid.*, IV, 13, 170; PG3, 712A.
- (11) *Ibid.*, II, 9, 59; PG3, 648A.
- (12) *Epistola* 4; PG3, 1072C.
- (13) Maximus Confessor, *Ambigua*, PG91, 1076AC.
- (14) Maximus Confessor, *Capita Theologica et Oeconomica*, V, 34, ΦΙΛΟΚΑΛΙΑ, ΑΘΗΝΑΙ, 1957-1963. (『神学の家園』の撰理とたぐらへ』、『フィロカリマ』Ⅲ所収、谷隆一郎訳、新世社、二〇〇六年)
- (15) *Ibid.*, V, 35.
- (16) Maximus Confessor, *Ambigua*, PG91, 1045A.
- (17) *Ibid.*, PG91, 1057CD.